

病葉（わくらば）

江別 三宅 浩次

虫喰ひの穴あまたある病葉に秋冷えの陽のわずかに射しぬ
移ろひの季節は知らずもみじ葉は美しくもあり哀しくもある
キャンパスの公孫樹並木に年老いし銀杏拾ひの背の丸さよ
もと紅葉今濡れ落ち葉その土地の色に染まりて消えなむとす
わが庭の躑躅の枝に来る春の芽吹きの際に病葉残る

ホルムズ

札幌 山口 康徳

ホルムズにタンカーおそふ悪き奴油断もスキもげにあらばこそ
時々画面にぎはすチャウチャウは悩む人らをなぐさむるがに
雨降らぬ氣候あれどもはびこれる事故・犯罪のつづく連日
かつてなき高温つづき人・牛・麦や秋刀魚もよわり漁亦減りぬ
車内より移動し眺む萩の花人鈍れるも草木敏感

怪談日本

札幌 古屋 統

次々に架空の高齢者判明す長寿国日本の根拠危うし
国勢調査非協力者の多きこと民生委員たりし義母は嘆きぬ
豹は死して皮を留めつ人間は年金詐取の疑惑を残す
どう見ても百歳生さられる脚は無し横断歩道を行く年寄りら
怪談の幽霊脚を怨まざり生きの身われら膝がガタつく

二十八期会（八月六日）

美唄 吉村 誠治

ロスよりの友と内地の友二人道内勢とで賑やかに集ふ
終戦後三年間のどん底の恵迪寮の暮らし懐かし
予科医類二十三名の寮生は十名となる人世無常
今日集ふ寮生四名真中にして肩を組みつ歌ふ「都ぞ弥生」
明後年六十周年の集ひには必ず会はむ氣負ひて別る

北海道医歌人会詠草

キレハイヌガラシ

札幌 浜島 泉

群れて咲く路傍のキレハイヌガラシ 暑き日は減り実へと替はりつ
紫のジャガイモの花 オレンジの花芯輝く作柄いかに
お迎へを疾くと願ひし日もありし 話すことなく見つむるばかり
夕闇に娶はすといふ恋堂 七夕までの暑き熱き日
五年前勤務せし地の 文芸の同人たりしひとりに遭へり

道

釧路 児玉 昌彦

自負強き医学者なれど家政婦にさとされようやく丸くなりしか
点滴もくすりも止めて平穩をとり戻したる老医学徒は
老いてなお語り尽きざる生き甲斐はシルクロードの苦難の旅路
栄光の道ひたすらに目指し行く息子の危うさ見守る父親
プライドを背に精一杯生きぬくか肩の荷下ろし楽に生きるか

追憶の日々

栗山 高田 剛太

海べりの小さな村の民宿の娘の語る訛り懐かし
スケッチ帳抱えて寒き川沿いの道行くふたり言葉少なに
お気に入りの本とレコード押しつけて君走り去る落葉のキャンパス
犬抱きてベンチに君は本を読む犬になりたき吾もあるかな
晩秋の空を仰ぎて雲行くを見ているだけの静かなる午後

夏

旭川 稻積 文子

阿波踊りの先導役する男の子真直ぐ前見て足取り確か
それぞれの衣裳揃えて競い合う伝統の踊りは深夜迄続く
張り形の金魚、蛸などを作る患者居て狭き医局は祭りの如し
雨足が透けて街路樹に降り注ぐ九月の雨は気儘に騒ぐ
若き日に有能なりし友が今ケアハウスに独りで入居せるとは